

葬式

胸にあの人の骨が刺
さる

P.N モリヤ
(森田沙彩)

人物

斉藤ハル (22) 紡績会社の社員

栄進次郎 (23) ハルの恋人

尾長チエ (21) 進次郎の許嫁

栄菊五郎 (48) 紡績会社の社長

斉藤宗吉 (45) ハルの父

上司

○栄紡績会社・外觀

背の高い煙突。横長の大きな屋敷。
木製の門には『栄紡績会社』の看板。

○同・工場・中

机と脇に直径150cm程のロール
が、奥の方まで整然と並んでいる。
ロールで流れて来る布を机で確認して
いる、全員紺の袴姿の従業員。
その中に斉藤ハル(22)。
正面のドアが開き、スーツに革靴、ザ
ンギリ頭の栄菊五郎(48)。
隣に同じくスーツに革靴、ザンギリ頭
の栄進次郎(23)。
上司が手をこねて、案内している。
従業員を横目に奥へ進む、栄、進次
郎、上司。

栄「どうだ」

上司「社長が選んだだけあります。イギリス
の機械の方が格段に製造量が増えてます」

栄、進次郎を横目で見る。

進次郎、本を広げ、指でなぞる。

進次郎「輸入品の綿より持ちがよく、肌触り

がいいと取引先が後を絶ちません」

上司「さすが天下の名古屋商人様。このまま

うなぎ上りですね」

栄、頷く。

ハルの脇を通りすぎる、進次郎。

ハルと進次郎、視線だけかわす。

進次郎、片手を腰に持っていていき、逆さ

までピースサインをする。

それを見たハル、顎を引き、微笑む。

進次郎、銀の装飾された懐中時計を取

り出し、栄に頷く。

栄「もうそんな時間か。進次郎、この後チエ

さんが会食をしたいそうだ」

振り返りドアの方を見る、栄と進次

郎。

色鮮やかな袴とブーツを履いた尾長チ

エ（21）が笑顔で手を振っている。

進次郎「ああ、そうですか。楽しみです」

進次郎、微笑む。腰でバツを作る。

ハル、眉をハの字にする。

○同・トイレ・入口・外

髪を整えながら出てくる、ハル。

時計片手に脇を通り過ぎる、進次郎。

進次郎「明日。夜に」

ハル、微笑む。

○やなぎ茶屋・入口（夜）

2階建ての日本家屋。

紺の袴姿のハルが周囲を確認しながら、引き戸の中に入る。

○同・店内（夜）

辺りを見渡す、ハル。

奥の襖の隙間から進次郎の手が手招きしている。

○同・奥座敷

進次郎、襖を閉めハルを抱きしめる。

ハル、微笑み、背中に手を回す。

ハル「話、どう？」

進次郎「大丈夫。父に話をつけるよ。最近じや恋愛婚の方が増えている。許嫁よりハルとの約束の方が先だ」

ハル、眉をハの字にさせ、

ハル「よく覚えてるね」

進次郎「あれはままごとじゃないから」

ハル、はにかみ、頷く。

○大通り・チエの乗った馬車・中（夜）

赤の座席に座り外を見ている、チエ。

道の隅で進次郎とハルが繋いでいた手を解き、反対方向へ進んでいく姿。

チエ「止めて！」

と、運転手側の壁を強く叩く。

○同・路地（夜）

路地の角を曲がろうとしているハル。

それをさえぎる、チエ。

ハル、ハツとし、一礼する。

ハル「こ、こんばんは」

チエ「進次郎さんと手を繋いでいたわね？」

ハル、顎を引き、視線をそらす。

ハル「その。とんでもございません」

チエ、ハルの袴姿を見て、

チエ「栄紡績の従業員ね。じゃあ私が許嫁と

知ってて？大胆。菊五郎さんが知ったらあ

なたどうなるかしら」

ハル、手足が震え、深く頭を下げる。

ハル「ご、ごめんなさい！私、その」

チエ「なら別れて。会社も辞めて。さもない

と家族ごと追い出してやる」

チエ、手で口元を隠しニヤリと笑う。

ハル、顎を震わせ、両手で裾を握る。

○栄紡績会社・工場長室

三つ折りされ『辞表』と書かれた紙を

上司に差し出す、ハル。
一礼して立ち去る。

○同・正門・中

背中を丸め、門の外へ向かう、ハル。
額に汗をかいた進次郎が、走ってハル
の肩を掴む。

ハル、眉をハの字にし、桜柄のハンカ
チで進次郎の額を拭く。

進次郎、その手を掴み、

進次郎「辞めるって！」

ハル、顔をクシヤツと歪め、

ハル「ごめんなさい。お付き合いも、その。

さようなら」

進次郎「え」

ハル、一礼し走って門を通り抜ける。

進次郎、ハンカチをただ見つめる。

○ハルの家・外観

日本家屋。玄関に『斉藤』の札。

○同・居間

横になつてゐるハル、鼻をすすす。

襖が開き、着物姿の斉藤宗吉（4

5）が首裏を搔く。

斉藤「何故かどこも断られる。栄紡績にいた経歴なら引く手数多なのにな」

ハル、体を丸め、膝を抱える。

○大通り・路地（夕）

走つてゐる進次郎、路地の角を曲がる。馬車の馬と正面衝突。進次郎、突き飛ばされ、仰向けに倒れる。馬車の運転手が駆け寄る。地面に血が流れる。

○ハルの家・庭

洗濯物を干している、ハル。

縁側に転がり込んでくる、斉藤。

斉藤「喪服！喪服はどこだ！」

ハル「喪服？」

と、首をかしげる。

○火葬場・外観

煙突と白い平屋。煙突から白い煙。入口に多くの人が合掌している。

○火葬場・中

黒の着物やスーツを着た多くの人。レンガ作りの窯を囲っている、栄、栄の妻、チエ。

人の隙間から火葬を見る、無表情のハル、隣に斉藤。

栄が振り返り、笑みを浮かべ近づく。

栄「おお。斉藤さんお久しい」

斉藤「この度はお悔やみ申し上げます」

と、一礼する。それにならうハル。

栄、ハルを見て微笑む。

栄「会社では立派な社会人だけど、外で会

うと斉藤さん家のハルちゃんだね」

ハル、無理やり笑みを作る。

栄「ハルちゃんが来てくれて進次郎も喜ぶ」

と、桜柄のハンカチを渡す。

栄「進次郎の懐に入っていたんだ」

ハル、顔を歪ませ、ハンカチを握る。

ハル「進次郎さんが安らかな眠りにつけるよう祈っています」

チエ、ハルに大股で近づき指さす。

チエ「よくそんな！事故にあった場所、家

と反対の方向なの！ねえ、分かる！？」

ハルの表情が抜け落ち涙を浮かべる。

栄、首を横に振りチエの肩を叩く。

栄「すまない。気が動転しているようだ」

ハル、俯きながら、

ハル「大事な人を亡くされたのですから、致し方ありません」

チエ、ハルを睨む。栄、頷く。

栄「骨嚙みをしてくれ。進次郎も喜ぶ」

と、チエと引き返す。

ハル、ハンカチに顔を埋め、肩を震わせる。

木製の台の上に黒い布。

その上に少し原型が残った人骨と銀の懐中時計が紛れている。

周りを囲む栄と進次郎の母、チエ、少し離れた所にハルと斉藤。他大勢。

栄、進次郎の母とチエ、泣きながら骨を1つ歯を立てて噛み、骨壺の中へ。

ハル、虚ろな目で骨を見て、ゆっくり骨を持つ。

ハル、涙を流しながら骨にかじりつき、喉仏が上下する。少し欠けた骨。

ハル、前かがみになり、せき込む。

斉藤、ハツとし、

斉藤 「お前、何やっているんだ！」

と、ハルの背中を摩る。

目を見開いてハルを見ているチエ、骨を噛もうとするが止め、下唇を噛む。

ハル、胸を押さえたまま、それを見て、薄く微笑む。

